

## 人生とはゴールの無い修行 〜天地自然に活かされて〜

大震災から早三ヶ月が経とうとして、テレビやマスコミは時事、原発事故の現在は報道しているが、被災者へ手向ける気持ち薄れてしまっている様な気がしてならない。テレビを付ければバラエティー番組を中心に楽しいプログラムが目白押しだ。私達が住む富山県に震災の影響はほとんど皆無と言ってよい。それ故、何事もなかったかの如く日々の生活を変わず送ってしまったがちなものだが、しかし、あの震災を決して忘れることなく、私達に出来る事を一生懸命検討していかねばならない事は、誰のどの立場にも言える事であると、私自身を含め改めて確認しておきたい。

さて、先月中旬頃のニュースで被災者が：「私達の生活は、未だに見通しがつかず、未来が暗い…。それに比べて自然の草花は、春という季節から、確実に夏へ移行していくのが目に見て分かる。私達は何時になったら、季節を進める事が出来るのだろうか？」と言う様な趣旨の言葉を述べていた。

仏教詩人であった故・坂村真民の詩で『一本の道』というのがある。『木や草と人間とどこがちがうだろうか？みんな同じなのだ。いっしょけんめいに生きようとしているのを見ると、ときにはかれらが、人間よりも偉いと思われれる。かれらは時がくれば、花を咲かせ、実をみのらせ、自分を完成させる。それにくらべて人間は、何一つしないで終わるものもある。木に学べ、草に習えと、わたしは自分に言い聞かせ、今日も一本の道を行く』と。

私達人間の心がいつの間にか傲慢になってしまい、自分が自然の一部だという事を忘れて、あたかも人間が地球を、自然を、支配しているかの如く、「環境にやさしく・地球に優しく」と振る舞ってきたツケが、現在私達の心を支配してしまっているように思う。

なるほど、確かに私達人間には、拭いきれない我欲というものを内在しているが為に、良かれと思う事も実は、ただ単に我欲の表象という事もあるものだ。

一考してみれば、天地自然（地球）には、元々人間は存在しておらず、悠々

とその命を輝かせてきたはずだ。それを私達人間の傲慢な心が、森林伐採・オゾン層の破壊、そして地球温暖化という因果を招いてきた。その一事をとってみても、人間は自然に謙虚にならざるを得ないのはいままでもない事だ。つまりは自然と共生させてもらわない限り、私達の生活（命）は保証されないという事になる。自然を敬い、畏（おそ）れを抱き、草花という目に見える大自然の命から、私達人間も自然の一部として、謙虚に学ばなければいけない事も多々あるかとも思うのである。

人間は雨を降らすこともできないけれど、風を吹かせることも出来ない。与えられた環境の中で辛いこと、苦しいこと、寂しいこと色々あるが、それらに共感しながら生きていくことが肝心ではないだろうか。それが分かれば全て人間は、謙虚にならざるを得ない。

謙虚になれば、感謝の気持ちわく。逆に謙虚でなければ感謝の念は起こらないとも言える。感謝の念が実感として理解した時に、私達は初めて真の命を生きるスタートラインに立つとも言えるのではないだろうか。そこからの人生は、見るモノ、聞くモノ、行う事、

その全てが新鮮で心揺さぶられる事になるのではないかと思う。

ささやかな私の経験談だが、荒修行を三度終了し、全ての行に全ての妙味があったと、その経験の全てが有り難く、感謝の気持ちを抱いている今日この頃。

修行の中で得た功德は、色あせる事はないが、行をしたという事だけで、それを鼻に掛けたり、肩書きだけで生きるとなれば、せつかくの辛く苦しい修業が無意味のものとなる。

地位・権力・肩書き、そういうものはあくまで私達人間の頭で作ったものばかり。そんな不確かなステータスなど、謙虚に生きようとする前向きな真の心には、もはや必要ない。

逆に、肩書きがある為に、感謝できない自分を作り出しているとすれば、本当の意味で苦勞をしたとは言えないのではないだろうか？心に信じるモノを抱き、それに伴う行いがあり、初めて謙虚で感謝できる真の心が目覚めるのではないだろうか？

私達の人生には死ぬか、生きるかの瀬戸際にしか咲かない花があると、思う。私達各人がその人生で得た美しい人生の悟り（気付き）の花を摘

み、皆で伝え分かち合おうではありませんか。自分の人生、つまり考え方や行動に遠慮なんて要りません。

自分の思う事、信じる事、それを実践行動していくだけです。私達人間は心と体の仕組みで出来ている。つまり心は遺伝子に影響を与え、肉体に影響を与えているというのが専門家の仰るところ。発願とか不退転の決意、真の心で必死に行うという覚悟。そんな気持ちで遺伝子に影響を与え、不可能とも思える修行をも乗り越えさせていくのだそうだ。ある意味で、人生を生きていくというのは、ゴールの無い修業とも言える。

私達は人生という荒修行を日々に行い、繰り返ししているのである。その修行も人生の大小にかかわらず、時には不平等にさえ思う事もあるだろう。私も時には、人間はどうしてこんなにも不平等なのだろうか？と思う事がある。幸せに見える人もいれば、不幸せに見える人もいる。ただこれは自分の心を通して、そう見えていただけで、人間は全て幸も不幸も、心一つでとらえ方が変わるもの。目の前でタンポポの穂種が突風に吹かれて飛んでいった。山に落ちる種

もあれば、アスファルトに落ちる種もある。人間もこれと同じ。自分の生まれたところがどんな場所だろうが、今いる場所がどんな環境だろうが、私達人間全ては自然の一部であるという事を、シツカリ自覚し、自覚したならば、

人生という荒修行の場で、天地自然と共生させていたたくように努力精進していかなければならないだろう。そこに傲慢心が芽生えるはずもなく、そうやってこそ初めて、真の生を充実させることができるのではないかと思う。真の心からとらえた現実を、精一杯噛み締め、世界に一つだけの命の花を咲かせようではありませんか。遠慮は要りません。自分の人生自分が主人公。経験と感動という心のスタンプを、一つでも多く刻めるように、お互い励まし合ってくださいませ。

最後にご案内ですが、今月は大黒様のご祭禮が執り行われます。皆様のマスタ大黒様をどうかお連れ下さい。真成寺でお待ち下さっている親大黒様のお力をお借りして、一年の無病息災、家庭円満、社運隆昌など、福祿倍増の御祈禱会を厳修します。どうか家族全員参加で御参拝になって下さい。目に見えない功德を頂けます。心よりお待ちしております。

申し上げます。

再拝 谷川寛敬

## ちよつと一服

### 梅雨の由来は どこから来たの？

つゆの語源はいくつかあるようです。ひとつは、この時期はちょうど梅の実が熟する頃だから。

沖繩には梅の木がないので、あまり実感できませんが、県外では、梅雨の6月ごろに青い梅の実が、まるまるときれいに実っています。

新鮮な梅で「梅酒」を作るのに最適な時期でもあるのですね。

それから、「つゆ」の「梅」という漢字は、木へんに、毎日の「毎」と書きます。だから、毎日毎日続けて雨が降るこの時期に、この漢字が当てられた……という説もあります。

梅雨は、中国から「梅雨(ばいう)」として伝わり、江戸時代頃より「つゆ」と呼ばれるようになった。

「日本歳時記」には、「此の月淫雨ふるこれを梅雨(つゆ)と名づく」とあり

ます。

中国では、黴(かび)の生えやすい時期の雨という意味で、元々「黴雨(ばいう)」と呼ばれていたが、カビでは語感が悪いため、同じ「ばい」で季節に合った「梅」の字を使い「梅雨」になったとする説。「梅の熟す時期の雨」という意味で、元々「梅雨」と呼ばれていたとする説があります。

日本で「つゆ」と呼ばれるようになった由来は、「露(つゆ)」からと考えられますが、梅の実が熟し潰れる時期であることから、「潰ゆ(つゆ)」と関連付ける説もあり、梅雨の語源は未詳部分が多いようです。

